

手術医療の世界において、手術器具の発達は素晴らしいものがある。中でも次世代の医療改革の一端を担うのが医療用ロボット。藤田保健衛生大学病院には、2009年に日本初導入という医療用ロボット「ダビンチ」が活躍している。

大学病院ならではの先端医療の一端として消化器外科、泌尿器科、呼吸器外科、産婦人科、そして臓腑外科でもロボット手

藤田保健衛生大学
医学部外科学講座教授

堀口 明彦先生



「患者さんに置くに第一を常に念頭に置く」をモットーとする堀口先生

古屋病院(現名古屋医療センター)のルーテーションでさまざまな専門科を回ったが、最初から専門を外科と決めていたこともあり、2年目には外科を中心にさまざまな知識と技術を学んだ。この時期に消化器外科専門医である大橋満先生に指導を受け、全国の病院を一緒に回り、実践教育を受けた。この経験が現在の堀口先生の礎になっている。その後、国立名古屋病院で外科医員として91年まで研修を積んだが、藤田保健衛生大学医学部外科助手として帰局する。当時上司

「患者さんに負担の少ない、ロボット手術をやらなにか」と誘われたことで、アメリカでトレーニングを受けて帰国。さらに宇山先生に指導を受け、翌10年に本邦初のロボット支援臓腑切除術が行われた。

ロボット手術のメリットは「より低侵襲の手術が可能であり、三次元表示モニターを見ながら細い血管の同定処理も容易に行うことができるうえ、手振れ防止機能などにより安全な手術が実現できるようになった」と指摘する。ただし、現在は前立腺がん、胃がんは公的医療保険の対象になっているが、肝・胆・膵は自費診療となる。今後の課題は約300万円かかる医療費である。そのため、先進医療普及に向けて国への働きかけにも努力しているという。

今後、先進医療が普及していく中で、一番大切なことは、それに付随する知識や技術。11年に同大医学部の膵臓外科・総合外科の教授になり、今までよりも若手への指導に尽力している。

DOCTORが薦める
名 医

低侵襲な手術を実現
医療用ロボの先駆者

術が行われ、その手術件数はトップレベルといわれる。消化器外科の宇山一朗先生をはじめ多くの先生が行っているが、膵臓外科の堀口明彦先生もその一翼を担っている。

で先代主任教授(日本消化器外科学会名誉会長)の宮川秀一先生の指導により、2年後には同大の講師、その9年後には助教として若手の育成に励む。

それと同時に胆道外科、膵臓外科、内視鏡外科を専門として、手術時間を短く、手術時の出血をなるべく少なく抑え、過不足なく手術に当たることがモットーに、負担の少ない手術を目指す努力を重ねていた。

この兄弟は世界でも稀な存在として知られる。その理由は、兄弟ともに同じ藤田保健衛生大学医学部を卒業し、兄の高彦先生は同大の呼吸器内科の主任教授、弟の明彦先生は膵臓外科・総合外科の主任教授となっている。ともに医療の未来を担う兄弟である。

藤田保健衛生大学医学部 豊明市沓掛町田楽ヶ窪1の98、電話0562・93・2111。

堀口先生は名古屋北区の外科医の次男に生まれ、「救急車で運び込まれ、痛みに耐えられないと大騒ぎした患者さんが3日後には笑顔で帰っていく」という光景を見て育ち、当然のように外科医を目指した。

そして09年に医療用ロボット「ダビンチ」が導

1984年に藤田保健衛生大学医学部を卒業。研修は国立名

入される。宇山先生から

愛知県がんセンター中央病院
手術部長・伊藤誠二先生の紹介